

平成 22 年 4 月 28 日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520226  
 研究課題名（和文）フランスロマン主義に現れる音楽家像とユートピア - サンドとダグーの著作  
 研究課題名（英文）IMAGES OF MUSICIANS AND UTOPIA IN FRENCH ROMANTICISM - SAND AND D' AGOULT' S WORKS  
 研究代表者  
 坂本 千代 (SAKAMOTO CHIYO)  
 神戸大学・大学院国際文化学研究所・教授  
 研究者番号：80170611

研究成果の概要（和文）：サンドおよびダグーと、同時代の音楽家や空想的社会主義者たちの影響関係を、彼女たちの作品や書簡等を検討して明らかにした論文3本を発表し、この成果を踏まえたうえで、サンド作品における理想の音楽家像と彼女のユートピア思想との融合について考察した研究発表を行い論文を発表した。また、ダグーの作品中での音楽家フランツ・リストのイメージの変容と、当時のユートピア思想との関係についても研究発表を行い論文を発表した。

研究成果の概要（英文）：Based on an extended analysis of their works and personal correspondence, I published three articles about my research on the mutual influences of two French writers (George Sand and Marie d' Agoult), their contemporary musicians and certain utopian socialists. In addition, I presented and published the results of my research on how Sand united, in her works, her images of ideal musicians and her utopian ideals. I also researched how, in d' Agoult' s writings, the image of the musician Franz Liszt was transformed and how it was related to utopian ideas at the time. I presented these results and published an article.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：サンド ダグー 音楽家像 ユートピア思想 ロマン主義

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者坂本千代は、2004年に東京で開催された国際シンポジウム「ジョル

ジュ・サンドの20、21世紀への遺産：芸術と政治」のオーガナイザー兼発表者のひとりである。このシンポで取り上げた「芸術と

政治」は、サンド研究のみならず、広く文学研究全体の底流となる大きなテーマであるが、アジア初の国際サンド・シンポということで、我々はあえてこの課題を選んだのであった。このシンポをきっかけに坂本はサンドの音楽観や音楽家像と、彼女の政治的理想（特に「ユートピア」として表現されるもの）との関連に興味を持つようになった。また坂本は、数年前からサンド研究と平行して、サンドと同時代の女性作家であるマリー・ダグーの研究を行っていた。本研究はダグー（音楽家フランツ・リストのパートナーでもあり、音楽に関する造詣が深い）とサンドについて坂本がそれまで重ねてきた研究を3年かけてさらに深め、音楽家像とユートピア思想という切り口で新しい展望を開こうとしたものである。

## 2. 研究の目的

フランス・ロマン主義は一方で政治と深く関わる社会的な現象であるが、他方現実社会からの逃避をしばしばテーマにする。一見矛盾したこの2つの側面は実は同一の源から発し、産業革命に伴い人間が単なる労働力に還元される中で人間性の回復を表現する文学運動であると言える。こうした動きは18世紀の物質主義に反発して生まれたものであり、物質世界の上位に非物質世界を措定することにもつながった。サンドとダグーは音楽をこの非物質世界に通ずる扉とみなしている。

彼女らは当時の先進的な知識人として、同時代の思想家たち（マルクスによって空想的社会主義者と呼ばれた人々）から大きな影響を受け、それを自分たちの作品に反映させている。その作品群の主要ファクターのひとつがユートピアであり、彼女たちはそれぞれのユートピアを描いている。そして、その世界で重要な役割を果たすのは芸術家（もちろん音楽家を含む）である。

本研究は従来のロマン主義研究、サンド研究、ダグー研究の延長線上に立ちながらも、彼女たちの作品や書簡を「音楽」「音楽家」「ユートピア」という側面から考察して、フランス・ロマン主義の表象現象を新しい観点から描き出す試みである。

## 3. 研究の方法

サンドに大きな影響を与えた音楽家としてはリスト、ショパン、モーツァルト、ベートーヴェンを挙げることができる。彼女の著作・書簡の中でこれら実在の音楽家たちに関する部分を拾い上げて検討することと、彼女の創作した音楽家たちの検討を平行して行った。具体的な分析対象としては、サンドの

音楽観が鮮明に現れる自伝『わが生涯の記』、書簡集、エッセイ『旅人の手紙』、『印象と思ひ出』、小説『コンスエロ』、『ルドルシュタット伯爵夫人』、『笛師のむれ』、『アルディニ家最後の娘』、『リラの七弦』、『アドリアニ』等を取り上げた。

ダグーに大きな影響を与えた音楽家は誰よりもまずリストである。リストと彼の音楽に対する彼女の評価、音楽という芸術の持つ「力」や音楽家の特別な使命の認識等について、サンドの書いたものと比較しつつ考察した。具体的な分析対象としてはダグーの回想録、小説『ネリダ』、書簡集、リストとの実質的共作のエッセイ集『ある音楽学士の手紙』等を取り上げた。

彼女たちに大きな影響を与えた社会思想家として、サン・シモンとその弟子たち、フェリシテ・ド・ラムネおよびピエール・ルルーを取り上げ、彼らが芸術、特に音楽について述べているものを選び出して考察を加えた。

## 4. 研究成果

### (1) 主な成果

①19世紀前半のフランスにおける空想的社会主義者たちとサンド、ダグー、リスト、ショパンら当時の文筆家や音楽家たちの関わりの特徴とその分析を「きたるべき社会と芸術家の役割 サン・シモン主義者たち、ラムネ、ルルーの芸術観」という題名で刊行。

②サンド作『旅人の手紙』や書簡集および他の作品と、フランツ・リストの『ある音楽学士の手紙』のテキストをつき合わせることで、1830年代の彼らに共通の音楽観と相互影響関係を考察し、論文「ジョルジュ・サンドとフランツ・リスト - 『旅人の手紙』第七信」として発表。

③ロマン主義世代の流行現象とも言えるベートーヴェン崇拜から、サンドがショパンの影響のもとに徐々にモーツァルト派へと移行していったことを彼女の書簡等から検証し、論文「ジョルジュ・サンドと音楽家たち - ベートーヴェンとショパン」として発表。

④上記①②③によって実在の音楽家や空想的社会主義者たちとサンドとの関わりを明らかにしたので、それらを踏まえたうえでサンドのフィクションにおける理想の音楽家像とユートピア思想との融合についての考察し、論文「ジョルジュ・サンドの作品における音楽家像とユートピア思想」として発表。また、日本ジョルジュ・サンド学会で研究発表も行った。

⑤ダグーの作品に現れるフランツ・リストのイメージを研究し、現実の音楽家リストが彼女のフィクション中でどのような変容を遂

げているかを、大阪府立大学でのコロキウムで発表し、論文「マリー・ダグー伯爵夫人の生涯と作品 - 小説『ネリダ』における事実とフィクション」として刊行。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

#### ① サンド研究

サンド作品における音楽についての研究に関してはフランスとアメリカですでに何冊かの本が出版されているが、日本ではほとんど未開拓の分野であった。本研究は日本におけるその端緒となっただけでなく、フランスにおいても今まであまり顧みられることのなかった作品『印象と思い出』等の分析をとおして、作家サンドの想像力にショパンの音楽が与える影響の分析や、典型的なロマン主義的音楽家像の形成過程に迫ることができたという点で独創性を発揮している。それと同時に、我が国におけるロマン主義的想像力と音楽の関係についての研究にも、本研究は一定のインパクトを与えることができたと思われる。

#### ② ダグー研究

ダグーを伝記的側面から論じたり、彼女とリストの関係を研究した著作はフランスには少なくない。だが、彼女の小説『ネリダ』に現れるリストのイメージと執筆当時のダグーの社会観・ユートピア観を結びつけて、サン・シモン主義運動や社会思想家ラムネの影響という観点から追求した本研究は、内外のダグー研究においてもユニークな位置を占めている。

#### ③ 外国での位置づけ

本研究の成果として挙げた論文はすべて日本語で書かれ、日本で発表されたものである。しかしながら、本研究の研究代表者坂本は2007年にフランスのブレイズ・パスカル大学、2008年に米国カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校で開催された国際シンポジウムにおいてフランス語による研究発表（テーマは本研究と直接結びつくものではない）を行い、その際にサンドおよびダグーの作品とルルーのユートピア思想の関わりについて、本研究の成果を踏まえた自説を展開して討論を行っており、本研究は諸外国の研究者たちに対しても一定のインパクトを与えたと考えられる。

#### (3) 今後の展望

① 本研究の成果によって、サンドとダグーの政治的・社会的理想と、彼女らの著作中の芸術家像との結びつきの様相がかなり明らかになった。ところで、本研究を進めていくにあたって、坂本はフランスなど諸外国の資料のみならず、日本におけるサンド作品の翻訳書・研究書・論文等を調査する必要性に迫られ

た。そのことを出発点として、2012年がサンド作品最初の日本語訳からの100周年に当るのを機に「日本におけるサンド100年」を総括する著作を企画し、日本ジョルジュ・サンド学会員13名の共著として出版することを提案した。この提案が受け入れられ、現在プロジェクトが進行中である。今回の研究成果の一部は、2012年までに出版予定のこの本の中で、サンドの音楽家像を論ずる部分として展開される予定である。

② ダグーについては、研究の基礎となる資料を手に入れることが非常に困難であった。著作権問題などで、生存している関係者との調整がうまくいかなかったのか、フランス国立図書館やブリテイッシュ・ライブラリーをとおしても必要資料のコピーなどがなかなか手に入らず、今回の研究には間に合わなかったが、次回以降の研究にぜひつなげていきたい。

③ フランスの空想的社会主義者たち、特にラムネやルルーに関する研究には未開拓の分野が広くあり、今後の研究の余地が残っている。とりわけルルーに関しては、フランスにおける「最初の社会主義者」というだけでなく、その芸術論や女性論も当時の知識人たちに大きな影響を及ぼし、それが彼らの「血肉」となってあまりにも「あたりまえ」のものとなってしまったがゆえに、後の世代の人々からそれほど注目されなくなってしまったのだと思われる。ヨーロッパの20世紀と、それに密接に結びついた日本の20世紀の精神風土を考察する際に再検討されるべき重要な思想家であろう。本研究によって、19世紀中葉のフランスにおけるルルー思想の影響の広がりや強さを再確認した坂本は、今後ロマン主義芸術とこの思想の関わりについての研究を続けていきたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

① 坂本千代、「ジョルジュ・サンドとフランス・リスト」、『近代』、102、1-13、2009、査読なし

② 坂本千代、「ジョルジュ・サンドの作品における音楽家像とユートピア思想」、『国際文化学研究』、32、1-13、2009、査読なし

③ 坂本千代、「ジョルジュ・サンドと音楽家たち - ベートーヴェンとショパン」、『近代』、101、1-18、2009、査読なし

④ 坂本千代、「きたるべき社会と芸術家の役割 - サン・シモン主義者たち、ラムネ、ルルーの芸術論」、『国際文化学研究』、31、111-132、2008、査読なし

⑤坂本千代、マリー・ダグー伯爵夫人の生涯と作品 - 小説『ネリダ』における事実とフィクション」、『女性学研究』、15、1-20、2008、査読なし

〔学会発表〕(計2件)

①坂本千代、「天才音楽家の肖像 - コンシュエロからアドリアニへ」、日本ジョルジュサンド学会、2010年3月29日、慶應義塾大学

②坂本千代、「マリー・ダグー伯爵夫人の生涯と作品 - 小説『ネリダ』における事実とフィクション」、女性学コロキウム、2007年12月8日、大阪府立大学

〔その他〕

ホームページ等

<http://web.cla.kobe-u.ac.jp/staff/sakamoto/2009/09/cest-un-essai.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂本 千代 (SAKAMOTO CHIYO )  
神戸大学・国際文化学研究科・教授  
研究者番号：80170611

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし